福岡女学院大学紀要　人文学部編　第24号
２０１４年３月

音とラジオのメディア・リテラシー実践

－身近な音でつづるストーリーづくり－

林　田　真心子

音とラジオのメディア・リテラシー実践

－身近な音でつづるストーリーづくり－

林　田　真心子

1．研究の背景

この論考は，2013年度に，福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科メディア研究ゼミが，九州朝日放送（以下，KBC）のAMラジオ番組『おっきーのラジドラ学園』（以下，ラジドラ学園）と共同して行ったメディア・リテラシー実践の内容を記録するものである。本実践は，メディアとしての音に着目し，そこからラジオと私たちのコミュニケーションを考えていこうというワークショップの試みである。これまで約１年間にパイロット的に行ってきた実践内容を整理し，その課題と可能性を探り，今後の実践にいかしていくことを本稿の目的とする。

1-1　実践の視座

ラジオは，「音のメディア」である。そういった場合，一般的には，ラジオが「声」や「音楽」などさまざまな音を対象としていること，つまりコンテンツとしての音を届けるメディアであるという意味で理解されるのではないだろうか。しかし，メディアは，「人と人，あるいは人とものごとがコミュニケーションするための「媒（なかだち）」」（水越　2011：14）であり，それらが「情報技術と社会との絶え間ない交渉のなかで歴史社会的に形成されてきたことを明らかにする」（同上）というメディア論的視座にたてば，次のような意味

でも，ラジオは「音のメディア」であると考えることができるだろう。

私たちは，日々，たくさんの音に囲まれて暮らしている。試しに朝の風景を思い起こしてみよう。目覚まし時計，鳥のさえずり，まな板で野菜を刻む音，テレビのニュース，洗面台から流れる水，新聞をめくる音，車のクラクション…と，数限りがない。私たちはこうした日常にあふれる多種多様な音を知らず知らずのうちに聞き，発し，時にはやりすごしながら毎日をすごしている。溝尻真也は，こうした音は，「その中にいる人間の環境認識に作用し，その生活世界を構成する」（溝尻　2011：81）ものとして，まさしくメディアのひとつであると指摘している。その上で，溝尻は私たちがそれぞれに音を取捨選択し受容しているにもかかわらず，「その場にいる人間がその音環境を同一空間のものとして認識し，コミュニケーションし得るのはなぜなのか」（同上），そうした問いを考えることは，メディア・リテラシーをめぐる考察にもつながるとして，高校生や大学生を対象に，〈メディアとしての音〉について考えるワークショップを展開している[1]。

その際，溝尻が参考としている概念に，マリー・シェーファーによるサウンドスケープがある。サウンドスケープ（Soundscape）とはSoundとScapeをあわせた言葉であり，「音の風景」や「音の環境」と訳される。カナダの作曲家シェーファーは，この言葉を単なる造語ではなく，1960年代から70年代にかけて，「現代社会における新たなコンセプトとして初めて提唱した」（鳥越　1997：８）ものである[2]。

サウンドスケープとは「個人，あるいは特定の社会がどのように知覚し，理解しているかに強調点の置かれた音の環境。したがって，サウンドスケープはその個人がそうした環境とどのような関係を取り結んでいるかによって規定される」（Turax　1978：126）と定義されている（鳥越　1997：60）。シェーファーの構想の背景や，活動の詳細については紙幅の限界もありここでは十分ふれられないが[3]，シェーファーはさまざまな音の環境の調査研究に取り組むとともに，私たちの能動的な関わりにも着目し，それらを創造的活動に結びつけた「サウンドスケープ・デザイン」[4]を提唱，実践している。

上述の定義からもわかるように，サウンドスケープとは単なる調査や研究の対象ではなく，私たちとの関係性の上に位置づけられる「相互作用の場」[5]だと考えられている。それゆえ，サウンドスケープとは「地球上の様々な時代や地域の人々が自分たちの音環境とどのような関係を取り結んでいるのかを問題にし，それぞれの音環境を個別の「音の文化」として捉え直すもの」（鳥越　1997：12）でもある。

ラジオもまさに私たちの日常生活における音の環境を構成している。まずラジオは根源的に，要素としてさまざまな音を扱っている。効果音，ジングル，歌，ナレーションなどさまざまな音で描くラジオの音の世界は，そのものが１つの小さなサウンドスケープと考えられるかもしれない。また，ラジオが届ける象徴としての音を，私たちがいかに解釈し，うけとめているのかは，私たちの日々の音の経験や知らず知らずのうちに共有されている社会文化的コードと関係している。さらに，私たちのそうした認識が，ラジオの音に対して新たな意味を賦与していく相互補完的な関係にもある。一方，街角で，喫茶店で，車の中で，ラジオから流れてくる音はそのまま，社会のサウンドスケープを構成している。私たちは，そうした複雑な音の環境の中からメディアとしてのラジオを理解し，関係性をとり結んでいるのである。その意味において，本稿ではラジオを「音のメディア」であると位置づけたい。そして，その認識のうえで，改めてラジオをめぐるコミュニケーションを捉え直してみることができないだろうか。

ラジオをめぐるコミュニケーションを考えるとき，テレビやインターネット，携帯電話など新しい情報技術の浸透やそのほかのメディアとの関わりをめぐって議論されることは少なくない。それも大切であるが，私たちの社会における音の環境，重層的な音の相関の中から，ラジオをめぐるコミュニケーションがいかに生起されているのか考えていくことも可能ではないだろうか。

シェーファーも，著書『世界の調律』においてラジオ放送に注目している。例えばヴァンクーヴァーにおけるラジオ放送の内容を分析し，そのリズムやテンポが「イソリズム的，およびライトモティーフ的な素材」を繰り返し登

場させることにより小さなループを形成し，絶え間ない「音の壁」を為していること，それらは私たちの音の認識と少なからず関係していることを示唆している（Schafer1977＝2006：213-218，467-474）。

ただし，本稿がメディア論の視座にたった上で注目したいのは，そうしたラジオがもたらすサウンドスケープそのものが，なぜ，どのように生成されているのか，その過程や社会文化的なダイナミクスであり，同時にそれらを私たちの日常的なコミュニケーションとの関わりから読み返すことである。それは「メディアを介したコミュニケーションを反省的にとらえ，自律的に展開する営み」（水越　2011：154，2010：705）としてのメディア・リテラシーにつながるではずあろう。

1-2　ラジオ放送をめぐる状況

一方，こうした問題関心の背景には，日本のラジオ放送，とくにマスメディアがおかれている産業的，社会的状況もある。その厳しさを指摘する声が聞かれるようになって久しいが，近年は，特に東日本大震災を通してラジオの役割が改めて注目される一方で，伸び悩む聴取率やセッツインユースなどを背景に，改革を模索するものが少なくない。例えば，放送批評懇談会が発行する雑誌『GALAC』は2014年２月号で「岐路に立つラジオの未来を描く」という特集を組み，現場での新しい試みなどを掲載している。日本民間放送連盟（以下，民放連）発行の『月刊民放』でも，同じく2014年２月号で「ラジオの明日へ」と題し，「ラジオの改革試案」などを紹介している。

ラジオとリスナーとの関係性を再構築しようという試みも展開されている。日本放送協会（以下，NHK)と民放連は，2011年，「「若者のラジオ離れ」はラジオメディア全体にとって深刻な問題である」[6]，として若者層のリスナー拡大を目的とした共同キャンペーンを開始。2013年は「＼ラジオ　きいてみた／」と題して名古屋で展開され，パーソナリティが中学校を訪れる「学校訪問企画」や，中高生があこがれの職業の人と番組を通しておしゃべりをする「夢ラジオ企画」などが行われた[7]。また，民放連ラジオ委員会は，2013

年度から，「ラジオの価値を広く社会に訴求し，業界の活性化を目指す」（『月刊民放』2014年２月号：20）ものとして，「ラジオ再価値化プロジェクト」も開始し，共通ウェブサイトの開設などを行っている。さまざまなイベントや取り組みが行われているが，一方で，ラジオの未来を描くためには，今一度，ラジオをめぐるコミュニケーションがどのように紡がれているのか，私たちとの基層的な関係性に立ち返ってみる。そこから考えることもできるのではないだろうか。

このような認識をもとに，筆者は2013年より，福岡女学院大学人文学部メディア研究ゼミ（徳永至，林田真心子ゼミ）とその学生有志とともに「音とラジオをめぐるメディア実践プロジェクト」を展開。KBC『ラジドラ学園』のスタッフともに，メディアリテラシー・ワークショップを企画し，実践したものである。『ラジドラ学園』は，高校生らが制作したラジオドラマを紹介する番組である[8]。高校生を中心とした若年層を主なターゲットとしている。また，年に一度は，地元の高校生を対象に「おっきーのラジドラ学園セミナー」を開催し，スタジオ見学や，アナウンス・番組制作のレクチャー，ドラマをディレクターと協働して制作するワークショップを行うなどメディア・リテラシー活動[9]にも取り組んでいる。筆者やプロジェクトに参画している学生は，このセミナーにサポーターとして参加してきた。そうした活動の延長として，共同的実践をおこなうものとなったものである。特に，メディアの有り様が複雑に変容する中で，その基層にあるコミュニケーションの特性を理解するためには，世代や立場を超えたメディア経験や認識を交換することが重要な意味をもつと考えた。すなわち本実践は，ラジオの制作現場の送り手と，大学生が協働的に実践することで，音やラジオに対する互いの認識や理解を共有することを通して，普段何気なく接しているラジオとの関係性を異化することをめざすものメディアリテラシー・ワークショップでもある。

2.「音」を感じるワークショップ

2-1　実践の概要

プロジェクトに参加したのは，福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科，および表現学科の１～４年生13名である。筆者はプロジェクトを総括するとともに，ワークショップの考案を担当した。ただし，それぞれのワークショップのデザインは，常にKBCの酒井明宏と協働するなかから改善され，実践されたものであり，最終的な企画は共同制作であるといっていい。また，番組のオンエアに際しては，番組ディレクターの岩谷直生が担当した。プロジェクトの運営にあたっては，福岡女学院大学の徳永至がファシリテーターとして参画した。ここに記して感謝したい。

以下で紹介するのは，2013年５月から12月までに行った，パイロット的なワークショップの内容である。主に次の２つのワークショップからなる（表１）。これらは，１）音のメディアとしてのラジオを考えるにあたり，まず，私たちを取り囲むさまざまな音を感じ，音との関係性に自覚的になること。２）ラジオがいかに私たちの音の経験や環境と関係しているのかに気づき，ラジオをめぐるコミュニケーションについて主体的に考えていくことをめざしたワークショップである。以下，順に詳しくみていこう。

タイトル	①「月の音」ワークショップ	②「音のストーリーづくり」
概　　要	・季節の音を探して，ICレコーダーやスマートフォンに録音。 ・その音を全員で聞き合いをする。その際，その音を録音した背景等を共有する。 ・番組でオンエア	・「月の音」ワークショップで集めた音をつかって，短い音のストーリーを創作。ストーリーは，ジングル，コマーシャル，ドラマ等，ジャンルは問わない。 ・番組でオンエア

実施内容	・６月～９月まで，毎月音を録音。音を聞き合う会を，７月18日，８月22日，９月５日に開催。	第１回：８月７日に広島経済大学の学生とともにKBCで実施。「夏のおとはがき」ワークショップとして，秋の自分に届けるストーリーを制作。 第２回：９月５日にKBCで実施。季節（夏）の音を使ってストーリーを制作。 いずれも完成作品を番組でオンエア。

表１　ワークショップの概要

２-２　「月の音」ワークショップ

【ワークショップの流れ】

ステップ１：音の〈収集（録音）〉　～身近な「音」に気づく～

「わたしにとっての，その季節（月）の音」を探して，ICレコーダーやスマートフォンで録音する。

ステップ２：音の〈メモの作成〉　～「音」の経験をふりかえる～

音のタイトルをつけ，録音した日時，状況（録音の仕方など），音の説明（どんな音なのか），理由（どうしてその音をとろうと思ったのか），そのほか気付いたことを記述する。

ステップ３：音のイメージと経験の〈共有〉

放送局の送り手も含め，皆で集まり，それぞれの音を聞く。その際，まずは何の音なのかという説明なしに聞き，互いにイメージしあう。そのあとで，録音者は説明を加える。

ステップ４：音を番組で〈オンエア〉：　～「音」と再び出会う。「音」の保存～

オンエアされた「音」をきく。場合によっては，録音者が番組に出演し，「音」の経験を紹介する。

【実施期間】2013年６月～９月

【参 加 者】大学２年生～３年生６人

【実施場所】福岡女学院大学（収録はKBCのスタジオ）

このワークショップの第一のねらいは，季節を音で捉えることを通して普段あまり意識することのない身近な「音」を感じ，その風景に自覚的になることである。

初回「６月の音」では，参加者は試行錯誤しながら音を収集したようだった。思ったほど「季節の音」が身近になかったという感想や，録り方が難しかったという声が聞かれた。

「早朝の鳥のさえずり」を録音した学生の例を紹介しよう。サッカーの国際試合中継をみて，たまたま夜明けまで起きていたというその学生は，偶然にも６月らしいさわやかな朝の音の風景に出会い，スマートフォンをむけたという。しかしながら，録音された音はあまり明確ではなく，ステップ３の〈共有〉の会では，何の音なのか説明をきかなければわからなかった。学生は，確かに聞こえた音なのに，うまく録れなかったことを残念がっていた様子だった。一方，「コップの中の氷の音」や「シャワーの音」を録った学生がいた。「夏本番を前にした季節」を感じる音だという。それらは，室内の音であったことに加え，録音をするためにていねいに準備をされており，「鳥のさえずり」に比べて音質がクリアであった。そうした音の記録を聞き合うなかで，まずきづかされるのは，私たちの日常の実際の音の風景は，それほど「ハイファイ」なものではないということである。ここでいう「ハイファイ」（Hi-Fi, high fidelity）な環境とは，「音が密集したりマスキングすることなく明瞭にきき取られる状態」をいう（Schafer1977＝2006：561）。シェーファーは都市のサウンドスケープは歴史を通して「ローファイ」へ移行しており，そこでは「個々の音響信号は超過密の音の中に埋もれている」と指摘する（同上：109-110）。同時に気づかされるのは，私たちが通常ラジオできいているようなクリアな音を録音装置におさめることは，なかなか難しいということでもあった。マイクは細部の音を拾うものである[10]。一方で，これに対して，KBC スタッフからは，音は録り方次第で，全く違う意味をもつこと，聞こえ方もかわってくるという見方が言及された。例えば，このようなやりとりがあった。私たちのまわりの「音」は一カ所に静止しているもの

ばかりとは限らない。例えば，学生が録音した鳥は，木を移動し，飛び立つことによって音の距離感や聞こえ方がかわってくる。「音が動けば，その性質は変わる」(Schafer　1992：14) ものであり，シェーファーは，例えば「話者が机や椅子といった小さな物体の後ろを通ったとき，その声に生ずる微かな変化」のことを，「音の影法師」と表現している（同上：15)。一方，聞く側もそうである。聞く人（録音者）が，仮に歩きながら音を録った場合，どのように聞こえるだろうか。実際にKBCスタッフが街を歩きながら録音したという音が披露された。現れては消え，まるで自分のすぐそばを音が通り過ぎていくような新鮮な感覚に，参加者は驚いていた様子だった。こうしたやりとりは，私たちの音の風景を立体的，空間的に捉える契機となるだけでなく，ラジオが伝える音の風景が，どのように構成されているかを知るという意味で，メディア・リテラシーの学びにつながるはずであろう。

「７月の音」で，さらに具体的にみていこう。集まったのは次のような音であった（表２)。なお，表は参加者の「音のメモ」を参考に筆者がまとめたものである。

音のタイトル	音の説明	理由や気付いた事
①雨の日のビニール傘の内側	傘を開く音→雨が傘をたたく音（周り人々の声も）	友人に傘にいれてもらいながら。歩きながら。そろそろ梅雨あけだなと思って。
②風鈴	風鈴の音と「ふるポテ」（ファストフード店が提供するポテト）の音が混じっている	家でゴロゴロしているときに，風鈴の音で，少しでも涼しくなるなと思い，別の日にスタンバってとったもの。 妹の「ふるポテ」をふる音が風鈴を邪魔している。
③セミ	マンションの前の木の，セミの鳴き声。	去年，嫌な程鳴いていた経験から，また夏がきたなと思わせられた。
④セミ	大学の食堂前の，セミの鳴き声	冷房のきいた食堂を出た瞬間にムワっとした暑さに包まれ，その暑さを増すように鳴いていた。

⑤ベランダからきこえたセミ	ベランダの隣の庭の木の，セミの鳴き声（かすかに犬の声も）	朝起きて，ベランダのドアをあけたら，セミの鳴き声が聞こえて。今日も暑いのかなーと夏の暑さをセミの声で感じたため。
⑥セミの音	大学の食堂を出てすぐ木があるところ	夏を感じたので。帰る途中だったので友達に待ってもらい急いでとった。
⑦夏到来　－セミの鳴き声－	大学の池近くの木	今年は蝉が早く鳴いたので。
⑧フル稼働	乾燥機をまわす音	夏は洗濯物がたまり，大活躍しているから。
⑨エアコンの入れる音ときる音	自宅。オンボロなガタガタしたエアコンの音	エアコンの音や空気を感じる時，決まって高校生のときのプール上がり，ひやっとした教室に入るときを思い出し，いつもなつかしく感じるから。
⑩クーラー	家のクーラーから風が流れる音	７月になると急に暑くなりクーラーなしにはいきていけないため。クーラーの音ってなかなか聞こえづらいですね。

表２　「７月の音」

表２をみてわかるように，この月の大きな特徴は，「セミ」や「クーラー（エアコン）」など，同じ題材の音を収集してきた人が多くいたということである。それらが示唆するのは，私たちは知らず知らずのうちに，音の典型的なイメージを持っているということであろう。ただし，５人がとってきたセミの音は，同じ「セミを対象とした音」のはずなのに，全く様相が異なった。セミの種類が違ったということもあったが，それだけでなく，録り方や，背後に聞こえる音との関係性が，それぞれに異なる味わいをもたせた。たとえば⑤番の「ベランダからきこえたセミ」の音には，背後に犬の吠える声がはいっていた。録音した学生はそれがはいっていたことを聞くまで意識していなかったようだが，他の学生から指摘をうけた本人は，どうやら近所の犬らしいことや，いつもこの時間に鳴いているといったエピソードを披露した。そうした説明が加わったことで，参加者の想像は，犬の気持ちやセミと犬の関係にまで膨らみ，その場は多いにもりあがった。そうすると，音の風景の後景にあったはずの犬の鳴き声が，不思議と前景化して聞こえるものである。

同様に題材が重複していた「クーラー（エアコン）」音では，⑩が風の音

だけであいまいに聞こえたのに対して，⑨は「ピピッ」というスイッチ音が入っている。その音が加わるだけで，それがクーラーであることを決定づけた。私たちの音の認識は，そうした音のコードやその相関の中から編みあげられるものなのである。

加えてふれておきたいのが，「⑧フル稼働」の音についてである。これは，自宅の乾燥機の音を録ったものである。小刻みに，かつ，たんたんと，やわらかいような固いような音が続くものであった。最初に聞いた時は，誰もその音が乾燥機であるとはわからなかった。ヘリコプター，机をたたく音など全く違うものを想像していた人が多く，答えが披露されたときは大爆笑がおこったほどである。ではなぜ，７月＝乾燥機なのか。「洗濯物が増えて大活躍するから」という背景に皆共感した様子で，しばらく互いの洗濯事情で話がもりあがった。このように，音を聞き合う会では，音を媒介にしてお互いの何気ない日常生活が自然と共有される。なお，この音をきっかけに，KBCスタッフからは，効果音づくりの例が紹介された。ラジオドラマ等の演出において，似た音を他の道具をつかって創作するものである。音はその文脈や，聞く人の経験によって聞こえ方がかわってくることが，現場でのエピソードも含めて説明された。

これらの音は，その後，『ラジドラ学園』で放送された。番組は，パーソナリティであるアナウンサーが録音の背景やエピソードとともに紹介する回と，学生が出演し，アナウンサーとかけあいながらそれらを説明する回という２つのパターンがあった。このプロセスで，参加者は，自らがとった音がラジオというメディアによって再構成されたものを聞くことになる。「まったく何の音かわからなかった」「恥ずかしかった」などが率直な感想であった。

3．音のストーリーづくり

3-1　ワークショップの内容

次の段階として実践したのが「音のストーリーづくり」ワークショップである。2013年は2回行った（表1参照）。「音のストーリーづくり」は，「月の音」ワークショップで集めた「音」をつかって，短い音の作品をつくるものである。音遊び的に音を再構成するワークショップである。

まず，9月に行った実践内容を紹介していこう。ワークショップの流れは次のようなものである。

【ワークショップの流れ】
ステップ1：音の〈収集（録音）〉
　＊ただし，「月の音」で収集した音を中心に使用
ステップ2：音の確認
　どんな音が集まっているのかを確認する。
ステップ3：音のストーリーの制作
　グループにわかれて，ストーリーを考案，編集。
ステップ4：音を番組で〈オンエア〉
　オンエアされた「音」をきく。場合によっては，録音者が番組に出演し，「音」の経験を紹介する。
【実施期間】2013年9月5日
【参 加 者】大学2年生～3年生6人。
【実施場所】KBC ラジオスタジオ

ステップ3の「音のストーリー」の制作過程を中心に紹介しよう。作業は，3人ずつの2グループにわかれておこなった。参加者は，「月の音ワークショップ」に参加してきた経験から，「音」の理解や解釈についてすでに意識的になっていたので，テーマはあえて細かく設けず「季節を表現する」

ということだけとし，あとは参加者の感性に委ねた。ただし，KBC スタッフがあらかじめ「音のストーリー」サンプルを用意し，それを視聴するかたちで手順を学んだ。制作の条件は，1）これまで収集してきた音を使うこと（自分が集めたものでなくてもよい）。2）必要であれば，新しい音をつくったり，録ったりすることも可能。3）「ストーリー」は長さは1分程度ということだけで，ジングル，ドラマなど形式は問わない。なお，音の編集は，KBC スタッフがスタジオの機材を使用し，ディレクションを学生が担当するかたちをとった。できあがったのは表3のような音のストーリーである。なお，表の「概要」は，学生が記した説明文をそのまま転記した。

両グループとも偶然にも「ピピッ」という（元々は）エアコンのスイッチをいれる音を使用した。それぞれに音の解釈は異なっており，①は電子機器を稼動させるイメージ音として使用し，「仕事の雰囲気」を演出しているのに対し，②はラジオをつける音として直接的に使用している。ただし，いずれも行為を意味づける契機として，この音を使用していた。こうした表現は，参加者に，ひとつの音を多元的に解釈することが可能であり，それは聞き手の認識や前後の文脈によることを改めて気付かせたようである。

また，後に記してもらった感想コメントシートには次のような記述があった。「自分たちがとった音を使って，物語をつくるとなると，ただ音をとるだけじゃものたりないかな？」（3年生）。表3の「使用した主な音」は，タイムコードにそっておおよその流れを記したものであるが，実際のストーリーは，元々の素材を繰り返し使用したり，フェイドイン／アウトといった効果が施されている。それらの編集は，学生のアイディアだけでなく，KBC スタッフがサポートをしたものである。音は，必ずしもひとつの独立した音だけで意味を紡ぐものではなく，他の音との相関や，普段はあまり意識していない「音の影法師」のような空間的変化が折り重なることで，物語を織りなすのである。更には，音のない空白や，間，そういった「音を伝えない」ということによって，意味が生成されることもある。ある一定のまとまりをもった音のストーリーを制作する試みは，音と音のつなぎ目や重なりを意識

タイトル	概要	使用した主な音（「月の音」で録音した際の音の説明。数字はタイムコード）
①音の物語	「ある夏の日に，家で一人で仕事をしていて，気がつくと近所で夏祭りがスタートする。自分も一息つこうとビールを飲んでいると，友達から連絡がきて，自分も夏祭りにでかける」というイメージ。 仕事をしている雰囲気を出す為に，タイピングの音→夏祭りスタートの雰囲気を出す為に，祭りと打ち上げ花火の音→ビールを飲んでいる雰囲気を出す為に，缶を開けた音とごくごくと飲んでいる喉の音→携帯のバイブ音→下駄の足音で外に出た雰囲気を出してみました。	02″「ピピッ」というエアコンのスイッチ 04″ 教室でタイプする音 07″ 花火がうちあがる音 14″ 夏祭りの雑踏 19″「プシュッ」とプルトップを開ける音 25″ ケータイのバイブレーション 26″ 祭りの下駄の音（遠ざかる）
②ラジオのCM	深夜，勉強や課題に疲れた学生がふと気分転換にラジオを聞くというストーリーCM。最近では，ラジオを聴かない人が多いため，たまにはラジオを聴いてみるのもいいですよ，というメッセージを込めてつくりました。 冷蔵庫をあけ，飲み物を注ぎ，ラジオをつけてみる。そして窓を開けると秋の音。ちょっと気持ちが明るくなって，ラジオを聞きながら頑張ろうというお話です。	00″ 女性の声「宿題終わらん」 03″（ドアの音に似せた何か） 05″ 氷がグラスに落ちる音 07″ 水がグラスに注がれる音 14″ 氷をかき混ぜる音 15″ 女性の声「ラジオか〜。」 18″「ピピッ」というエアコンのスイッチ 20″『ラジドラ学園』オープニングタイトル （そのまま薄くBGでひっぱる） 29″ 足音が近づく 36″ ガラガラというドアか窓を開ける音 39″ 鈴虫の鳴き声 47″ 女性の声「よし。やるか」 50″ ドアの音 53″ ナレーション「秋の夜長は，KBC」

表3　学生が制作した「音のストーリー」

してみるという意図も含まれていた。また，このように，送り手と協働でつくりあげることは，学生にとってはラジオの実際を体験する機会となったようだ。

・「夏のおとはがき」ワークショップ

8月の実践は，広島経済大学の土屋祐子との合同実践として行ったもので

ある。広島経済大学の２年生男女計８人と，福岡女学院大学の１～２年生５人の計13人が参加して８月７日にKBCで行われた。この回のワークショップの企画は，土屋と林田の共同で考案したものである。学生はいずれも，このプロジェクトに始めての参加であったことや，広島と福岡という違う地域を拠点とする学生の協働という状況をふまえて考案した１回完結型のワークショップである。いうならば，「音のストーリーづくり」ワークショップの展開版ともいえるものであった。まず，参加者には，「広島」「福岡」それぞれの「８月の音」を事前に収集してきてもらった。それを聞き合った上で，それらをくみあわせて短い音のストーリーをグループごとに制作した。制作した「音」の番組オンエアが翌月であったことから，「夏のおとはがき」と題し，１ヶ月後の秋を迎えた自分たちに送る音のメッセージとテーマを設定した。他の実践と大きく異なるのは，収集した音に地域の特性があらわれたことがある。例えば，広島からの参加者には，平和公園や式典の音を録った学生もいた。一方，福岡の学生のものには，祭りの風景に福岡にゆかりのある民謡のメロディーが含まれていたりした。「音」を媒介に，地域のそれぞれの夏のイメージや，日常生活における文化にふれることができたのは大きな特徴である。地域を超えた文化の相互理解にもつながったようである。その意義については，また改めて検討していきたい。なお，学生が制作したものは，ジングル風，コマーシャル風，ドラマ風のものなど，多様でユニークな音のストーリーであった。

３-２　実践からの気づき

以上，「音のストーリーづくり」ワークショップを試みたのには，主に次の３つのねらいがあった。第一は，季節を身近な音だけで「表現」してみることにある。「月の音」ワークショップは，季節の音を感じ，「捉える」ことに重点が置かれていたが，今度は，音と限られた言葉だけで「表現」することになる。つまり，その循環を用意することで，そのなかから，音との関係性を考えてみることである。第二は，音との関係性の編みかえである。私た

ちの身近な音を，改めて，ストーリーにするというまなざしをもって聞いてみることで，今までとは異なった解釈が可能であることや，違う意味に聞こえてくることを経験することである。第三は，グループ作業をすることで，同じ音であっても，人によって多元的な解釈や表現ができることを互いに感じる事である。コメントシートに，「音は使い方次第で別の音に生まれかわることができるんだなと感じました」（1年生），「自分の生活の音は当たり前すぎて気にしていませんが，録音しようと思えば，どんな音でも面白いと思えたり，使えると考えました」（1年生），「組み合わせによって，人への伝わり方が変わる」（2年生）といった記述がみられることから，こうしたねらいは，ある一定の成果をもって参加者にうけとめられているのではないかと思っている。

一方，ラジオというメディアについて，次のようなコメントがみられた，「普段，ラジオはひんぱんに聴くことがないが，（中略）改めてラジオは「聴く」という意味でテレビとは違った良さや魅力があってラジオが好きになりました」（3年生），「自分の録音した音がラジオで流れることもあって，またラジオを聞きはじめました。音を集めてみて，いろんな音があることもわかったし，改めてラジオのおもしろさとか可能性というか幅広さみたいなものを感じました」（3年生）。「自分たちもラジオをつくることに携わる上で，聴く側だけだった時とは異なり，ラジオの聴き方が変わったりしました」（3年生）。こうした記述からは，ラジオとのコミュニケーションのとりかたが変容したことがうかがえる。どのように変容したのかは，よりていねいに検討する必要があるだろうが，ラジオとの新しい関係性を描くための実践としての可能性が，感じられるものであった。

4．今後にむけて

最後に，実践の課題と可能性について検討を加えたい。

冒頭に記したように，本稿は，継続中の実践を一旦整理し，概観してみる

ことと，そこから得られた知見を今後の実践へいかしていくことまでを射程とした。その際，全体として，参加した学生の様子や気づきを中心に論を展開したため，ラジオの送り手に対する効果がほとんど検討できていない。先述したように本実践は，ラジオの送り手と受け手が互いに視点を交換しながら，ラジオの未来を共に描くことを目的のひとつとしている。つまり，ラジオの送り手のメディア・リテラシー実践でもある。しかしながら，その点は，紙幅の限界もあり，ほとんど検討できなかった。今後，ぜひ検討を加えたい。

第二の検討課題として，音を録音機器で録る限界と可能性がある。港千尋が「モノをただ見るのと，鉛筆を持って描きながら見るのとでは大いに違うというヴァレリーの言葉に倣えば，世界を肉眼で見るのと，カメラを持って見るのとでは，やはりその視覚経験に大きな違いがある」（港　2000：95）と指摘したように，私たちは何をもってみるかによって，経験，媒介作用は大きく異なってくる。それは視覚に限らない。本実践では，参加者は最初から，録ることを目的に，音と出会っている。つまり，「スマートフォン（ICレコーダー）を持って聞く」ことであり「音を録る」というまなざしで音環境とむきあうことであった。それは，参加者の音への気づきやと音の風景との関わりに少なからず作用しているであろう。しかしながら，一方ではスマートフォンといういつも持ち歩いている身近な情報機器を使用したことで，日常の風景の中に違和感なくとけこみ，ふとしたときの何気ない音を逃さず保存できたという利点もあった。シェーファーは『サウンド・エデュケーション』の中で，音を声で表現する，テープレコーダーで録音するなどさまざまなアプローチ方法を紹介している。本プロジェクトでも，音に対して，何をもってみるのか，あるいは何ももたずにみるのか，いくつかのパターンを試していくことも可能であろう。

今後の可能性として，音が媒介するコミュニケーションにも注目しておきたい。実践全体を通してみうけられたのが，参加者が音を媒介にして，互いの何気ない毎日の出来事や，経験を共有する姿であった。学生同士で，あるいはラジオ局のスタッフと学生で，しばしば話がもりあがるその様子は，ま

さしく，音がコミュニケーションを媒し，生起するメディアであることを示していた。その話題は，それぞれのラジオ観にもしばしば及んだ。日常の音や，ラジオだからこそ媒介されるコミュニケーションをより探求していくことは，メディア・リテラシー実践の充実にもつながるかもしれない。また，私たちは，本実践を短期集中型ではなく，長期的に，かつ，日常的に展開していく可能性を感じている。その理由のひとつに，本実践は，音のアーカイブづくりにもつながるのではないかということがある。参加者が集める「月の音」を継続して蓄積していけば，それはそのまま，日常の音の風景を保存することになるだろう。マスメディアのプロフェッショナルのまなざしで録られた音だけでなく，市民の日常生活の中から記録された音も含め，多様な音を残していくことは，時代とともに変容する音の風景の記録として，意味をもつことだろう。

注

[1] 詳細は，溝尻（2011）を参照されたい。

[2] 鳥越によると，シェーファーの活動において「サウンドスケープ」という言葉がある程度輪郭をもって現れたのは，1969年の著書『新しいサウンドスケープ』（*The New Soundscape*）である（鳥越　1997：32）。

[3] サウンドスケープという考え方の根底には，西洋近代化が制度としてだけでなく，感性の近代化をもたらしたことに対する問題意識がある。鳥越によると，シェーファーが提唱した背景には「西洋近代音楽の枠組みからの解放への欲求や，騒音問題への関心，非「西洋近代」音楽の再確認あるいは発見」」といった音楽的精神があった（鳥越　1997：26）。

[4] サウンドスケープ・デザインとは，「サウンドスケープという考え方にも基づいたデザイン活動」である。具体的には，音環境をめぐる調査研究活動や教育的実践，アートパフォーマンスなど広範囲におよぶ意味合いを含む。（鳥越　1997：144-156；山岸美穂・山岸健　1999：68）。

[5] シェーファーらはサウンドスケープの調査を進めていくうちに，それらが「調査対象として隔離できる」ものではなく，「特定の共同体あるいはその構成員による独自な知覚や認識と切り離すことのできないもの，まさに「相互作用の場」として意識されるよう

になった」と鳥越は記している。（鳥越　1997：58-59）

[6]「第１回 NHK・民放連共同ラジオキャンペーン　はじめまして，ラジオです」2011年２月２日報道発表資料（日本民間放送連盟ウェブサイト，http://j-ba.or.jp（2014年１月30日アクセス））における実施主旨を参照。それによると，「ラジオから若者たちへの働きかけを広く全国に継続していくこと」を目指すものであり，「日頃ラジオに接触していない若者たちをターゲットとしたキャンペーン」であった。

[7]「NHK・民放連共同ラジオキャンペーン in 名古屋　ラジオきいてみた」2013年９月12日報道発表資料（日本民間放送連盟ウェブサイト，URL は同上），『月刊民放』2014年２月号参照。

[8]『おっきーのラジドラ学園』は毎週火曜日の深夜24時30分から放送されている番組である。概要は，ウェブサイト（http://www.kbc.co.jp/radio/radidora/）を参照されたい。また，当番組におけるメディア・リテラシー実践への取り組み等の本文上の説明は，KBC ラジオ局の酒井明宏氏への聞き取りに基づいている。

[9] 九州朝日放送は2009年度「民放連メディアリテラシー実践プロジェクト」に参加している。このプロジェクトは放送局の送り手と中学生や高校生など子どもたちが共同的に番組づくりを行うことなどを通じて，ともにメディアリテラシーを学び合うものである。詳細は，日本民間放送連盟（2010）『民放連メディアリテラシー実践プロジェクト報告書2009年度』を参照。なお，筆者はこのプロジェクトにファシリテータの１人として参加した。

[10]　シェーファーは「マイクは細部の音をひろう。マイクはいわばクローズアップを撮るもので，航空写真に対応するものは撮れないのだ」と，カメラの例に置き換えて，その特性を指摘している（Schafer1977＝2006：33）。

参考・引用文献

港千尋（2000）『予兆としての写真』岩波書店

溝尻真也（2011）「〈メディアとしての音〉が持つ意義と可能性　－音をめぐるメディアリテラシー実践を通して－」『愛知淑徳大学論集メディアプロデュース学部篇　第１号』愛知淑徳大学　81-93

水越伸（2010）「メディアと社会」『現代用語の基礎知識2011』自由国民社　701-710

水越伸（2011）『21世紀メディア論』放送大学教育振興会

鳥越けい子（1997）『サウンドスケープ　その思想と実践』鹿島出版会

山岸美穂・山岸健（1999）『音の風景とは何か　サウンドスケープの社会誌』日本放送出版協会

Schafer, R. Murray (1977=2006) *The Tuning of the World*, New York: Alfred A. Knopf（鳥

越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕訳『世界の調律　サウンドスケープとはなにか』平凡社）
Schafer, R. Murray（1992）『サウンド・エデュケーション』（鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦訳）春秋社
Truax, Barry. ed. (1978) *A Handbook for Acoustic Ecology,* Vancouver: A. R. C. Publications
「どうなるラジオ，どうするラジオ」『GALAC』2012年５月号　放送批評懇談会　12-33
「岐路に立つラジオの未来を描く」同上2014年２月号　12-37
「ラジオと若者」『月刊民放』2013年２月号　日本民間放送連盟　4 -17
「ラジオの明日へ」同上2014年２月号　4 -25